

(様式 17)

学位論文審査の概要

博士の専攻分野の名称 博士 (医 学) 氏 名 渡 邊 史 郎

	主査	教授	佐 藤 典 宏
審査担当者	副査	教授	豊 嶋 崇 徳
	副査	教授	橋 野 聡
	副査	教授	白 土 博 樹

学 位 論 文 題 名

Methotrexate 関連リンパ増殖性疾患における ^{18}F -FDG PET/CT の有用性についての研究
(Studies on the usefulness of ^{18}F -FDG PET/CT for assessing methotrexate-associated lymphoproliferative disorder (MTX-LPD))

審査にあたり、副査の橋野教授から、FDG PET/CT は病変の消失を予測できるのか、という質問があり、申請者は FDG PET/CT で、悪性病変の活動性や活動病変の体積を評価することで予測することが出来ると考えた、と回答した。副査の白土教授からは、今回の FDG PET で寛解予測は難しいという結論に対しどう考えるかという質問があり、申請者は MTX-LPD の原因は免疫系の異常が予測されており、免疫能と比較すべきと考えるが、直接的に免疫能を評価する PET 検査は容易に得られず、間接的に免疫能を反映する所見があればそれらと比較していくべきと回答した。副査の豊嶋教授からは、遺伝子異常などのデータと比較するべきではないかという質問に対して、臨床的に簡便なものも必要でありヘテロな疾患であるからこそいわゆる radiomics を評価した今回の研究は重要なものだと思うと回答した。最後に主査の佐藤教授からは、なぜ FDG PET/CT で寛解が予測できると思ったかという質問があり、申請者は悪性腫瘍の活動性が高ければ残存しやすいと考えたと回答した。それに対し、このような反応性に広がる病態では、広がりも早い病変が消失するのも早いと考えられるかどうかという質問があり、申請者は悪性腫瘍ととらえたため、その考えではなかったが、研究を経験した後ではその考え方のほうが当てはまると思う、と回答した。また、今後はどのように研究を進めていくべきかという質問があり、申請者は糖代謝を評価する FDG PET では限界があり、その他の要因を評価する必要があると回答した。

この論文は MTX-LPD 症例において FDG PET/CT が局在・病期診断に有用であることを示した点で高く評価され、今後は FDG PET で別の方法や他の modality を用いて MTX-LPD の自然寛解を予測することが期待される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。